

スクーンメーカーが蒔いた「宣教の種」150年後の実り

ー グランディ郡歴史協会博物館ドーラ・E・スクーンメーカー常設展示に至る経緯 ー

河見 誠

【要旨】

青山学院は1874年11月16日ドーラ・E・スクーンメーカー宣教師により始められた麻布の女子小学校からその歴史がスタートし、2024年に創立150周年を迎えた。まさにその2024年、アメリカイリノイ州のグランディ郡歴史協会博物館において、ドーラ・E・スクーンメーカー常設展示が開始されることとなった。

ドーラが日本で蒔いた「宣教の種」は、150年後に今度はアメリカに還流して、ドーラが育ち、宣教を決意し、そこから日本へと旅立ったグランディ郡に蒔かれることになり、常設展示という形で新たに花を咲かせはじめたのである。これは決して意図された企画ではなく、関わった者たちの思いを越えて波紋のように広がっていったムーブメントであり、それ自体ドーラと向き合い対話するプロセスであった。本稿は、この展示が未来に向けて、国境を越えたさらなるムーブメントの出発点となることを期待しつつ、その約一年の経緯を報告するものである。

キーワード：ドーラ・E・スクーンメーカー、常設展示、グランディ郡歴史協会博物館、青山学院創立150周年、宣教の種

I はじめにー常設展示の意義ー

青山学院は1874年11月16日ドーラ・E・スクーンメーカー宣教師により始められた麻布の女子小学校からその歴史がスタートし、2024年に創立150周年を迎えた。まさにその2024年、アメリカイリノイ州グランディ郡モリスのグランディ郡歴史協会博物館 (Museum of the Grundy County Historical Society. 以下「博物館」という。) において、スクーンメーカー常設展示が始まり、6月29日にオープニングセレモニー (Opening Ceremony for the Dora E. Schoonmaker Exhibit) が催行された。

ドーラは5歳の時に一家でウィルミントン (Wilmington) に移住してきて、8歳で海外宣教への志を抱く。その後13歳の時にシャナハン (Channahon) に引っ越し、高校卒業後、モリス (Morris) で小学校の教師となる。その約4年間の教師経験を経てメソジスト

監督教会夫人海外伝道局 (Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church. 以下WFMS-MECと略す。) からの初めての日本への宣教師として派遣される。ウィルミントン、シャナハン、そして(上記博物館の所在する)モリスのあるグランディ郡は、その意味で青山学院の原点の一つとも言えるであろう。



グランディ郡歴史協会博物館

しかしこの常設展示は意図的に計画された企画ではなかった。2023年8月から始まった小さな歩が新たな動きを生み出し、それがまた新たな動きを生み出すという形で、関わった者たちの思いを越えて波紋のように広がっていった結果である。同じことはしかし、ドーラの歩みそのものについても言えるであろう。その意味も重ね合わせて、「今、ドーラの蒔いた小さな種が150年後、モリスにおいても新しい芽を出し、更にダイナミックに花開こうとしている」のである¹。

「青山学院大学スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター」は「スクーンメーカー」の名前を冠している。それは、本センターが、青山学院女子短期大学閉学に伴い、2021年4月に、女子短期大学総合文化研究所内設置のジェンダー研究所を移管継承する形で設置されたことに基づく²。そのような経緯に基づいて、センター規則第2条は「青山学院女子短期大学において行われていたジェンダー研究を受け継ぎ、青山学院における女子教育の伝統を新しい時代に継承するとともに、キリスト教精神に基づいて本学におけるジェンダー研究・教育を発展させ、青山学院及び社会に貢献する、という目的を掲げている。継承し発展させるべきものの原点となるキリスト教宣教師ドーラ・E・スクーンメーカーと向き合い、時代を超えた対話を行うことができる場が、ドーラが海外宣教を決意しそこから日本に旅立った、まさにその現地であるグランディ郡に生まれたことは、青山学院にとって、そして本センターにとって大きな意義があるであろう。

本年報においては、ドーラの蒔いた「宣教の種」の150年後の実りである、この博物館常設展示の報告のいわば第一部として、展示に至った約1年の経緯を記す。そして、常設展示の内容とその説明については、報告の第二部として別稿で述べる³。この1年はそれ自体、ドーラと向き合い、対話をするプロセスであった。その意味で本稿はドーラとの対話のプロセスの報告、証言ということになる。

Ⅱ ドーラとの対話の輪の広がり

1. 2023年前期

2023年8月より一年間、私は在外研究の機会をいただいた。そしてアメリカンフット

ボールでも有名な、カトリック大学University of Notre DameのLaw Schoolに受け入れていただくこととなった。この大学はインディアナ州サウスベンド（South Bend）という市に位置している。インディアナ州はイリノイ州の隣で、サウスベンドからシカゴには車で西に2時間ほどの距離である。

また、ドーラが幼少期から青春時代を過ごし、日本に旅立つ準備として教師をしていたウィルミントン、シャナハン、モリスといった市や村もイリノイ州にあり、やはりサウスベンドから車で南西に2時間半ほど、またシカゴからも南に2時間ほどの場所にあることが分かった。

そこで折角のチャンスなので、在外研究中に、二つのことをしておこう、と思い立った。一つには青山学院校友会シカゴ支部の皆さんにご挨拶すること、もう一つにはドーラが生活していた場所を訪問してみることである。そのため、出発前に、一方では関根茂校友会長に、シカゴ支部長の連絡先を教えていただいた。他方で、『しなやかに夢を生きる－青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』⁴著者である棚村恵子師に、ドーラゆかりの地の住所を伺った。当初、全く別個の問合せのつもりであったが、結果的に、この二つのアプローチがドーラ展示へと見事に結びついていくことになる。

2. 2023年8月－渡米－

日本に台風が直撃し、フライトが心配されたが、何とか無事に予定通り2023年8月3日にシカゴに到着した。そしてシカゴからサウスベンドに移動する前に、伊藤泰彦校友会シカゴ支部長にお会いすることができた。その際、ドーラのこと、そして近いうちにモリス等を訪問しようと考えていることをお話ししたところ、伊藤支部長もまた、青山学院150周年ということで、4月のシカゴ支部総会において、創設者のドーラについてお調べになり話題提供なさったということであった。またモリスはご自宅から1時間位の所にあるので、調査の際には一緒に参りましょう、とおっしゃって下さった。この伊藤支部長との出会いがなければ、その後「宣教の種」プロジェクト（後述）が動くことは無かった。

3. 2023年9月－ドーラゆかりの地訪問－

棚村師からは、ドーラゆかりの場所について、ワード文書3頁にわたる丁寧な説明と情報を送っていただいた。その案内に基づき、9月13日、最初にモリス市の図書館を訪ねてみた。棚村師が大変お世話になったけれども「恐らく退職されているでしょう」と書かれていた司書のデビー・ステフェス（Deborah Steffes）氏が、もしまだ勤務していらっしゃるとすれば、まずお会いしたいと考えたからである。図書館に入ってカウンターにいた職員に尋ねてみたところ、やはり既に退職しているとのこと。しかしステフェス氏は今、近くのグランディ郡歴史協会博物館で学芸員をなさっている、そしてこの日は休館日だが、博物館に連絡をすれば会えるはず、と連絡先を教えてくれた。加えて、棚村著書（309頁）の写真を見せながら、ドーラが教鞭を執っていたセンター・スクール跡の医院の場所を尋

ねてみたところ、「この歯科医院はそこの角を曲がったすぐにあるよ」とのこと。モリスは人口1万4千人ほどの小規模な市で、「顔の見える」コミュニティなのである。

教えられた場所に行ってみると、その医院は確かに学校の面影のある建物（当時の学校の一部）であった。150年前にこの場所のこの建物でドーラが教鞭を執っていたのだ、と思うと、感動で体が震えた（「報告第二部」[注3参照]に写真掲載）。

棚村師は、「彼女の足跡は日本にもアメリカにもあまり多くは遺されていない。しかし、彼女が呼吸をした『夢の跡』に立つと、ドーラの命の残照のようなものが感じられてならなかった。まるで、『ラジウムから放たれる放射線のように』（フランクフル）、ドーラが今でも何かを語っているように思えたから不思議だ。…歴史は手だけではなく、足でも書くことを学んだ。」と振り返っているが（棚村著書308頁）、私も同じように「命の残照」のようなものを確かに感じた。私の場合、ドーラと同じ場所に立っていることに加えて、苦労してドーラの足跡を掘り起こしていった棚村師と同じ場所に立つことができた、という感動もそこに加わって、体が震えたのだと思う。

さて、棚村師から一つ頼まれたことがあった。それはドーラが帰米するとき蓮の種を持ち帰りデュペイジ川（DuPage River）に蒔いたものがイリノイ運河で大きく繁殖しているという記事（*Morris Daily Herald*, Aug. 5, 1922. 地域の歴史研究者が発見した記事内容を、2007年にステフェス氏が棚村師に送ってくれたもの。）の真偽、すなわちこの記事から約100年後の今も運河に蓮が咲いているかどうか確かめてみてくれないか、もし咲いていたらビッグニュースであろう、という依頼である（この記事は博物館常設展示ステージ5に展示されている）⁵。これは確かめる価値ありと思ったが、どこに行けばよいか見当がつかなかった。運河を目指してドライブし、水面にたどりつきそうな道路を走ってみた。そのどれも途中で行き止まりという繰り返しであったが、さらに運河沿いの公園（Channahon State Park）を探して行ってみると、そこに運河の遊歩道への入り口を見つけることができた（I & M Canal State Trail）。そのトレイルに入って少し歩くと小さなダム（Channahon Dam）があった。果たして、その水面には（睡）蓮の大群があったのである。1922年の記事には「エジプト（ママ）から戻ったドーラは持ち帰った種をデュペイジ川に蒔き、その種はシャナハンの水門（locks）を越えてイリノイ川と運河に広がり、今繁茂している」と書かれてある。目の前は確かにデュペイジ川であるが、今立っているダムが記事の水門であろうか。花の季節では無かったので葉と茎だけが残っており、また葉の形状からすると睡蓮かも知れない。またこれがドーラが蒔いた種に由来する蓮かどうかについてはさらなる調査が必要であるが、100年前の記事の信憑性はかなり高そうである。棚村師が推測するように、ドーラが種を持ち帰ったとするとその種は、日本における近代農学の祖であり、ドーラの学校創設を助けた津田仙が持たせた可能性が高いだろう。

青山学院の女子教育の基礎を創り上げたドーラは、5年で帰米し、次の宣教師にその発展を託す。ところが帰国しシャナハンに戻った後、苦労して建設した「海岸女学校」が焼

失してしまう。ドーラはすぐにその再建の為に、今度は米国で資金の寄附集めに奔走する。ドーラがいつ種を蒔いたかは不明であるが、もし焼失後であればなおさら、日本において蒔いた「宣教の種」が、苦境の中でも大きく花開くようにと、切なる祈りをこめて「蓮の種」をデュペイジ川に蒔いたに違いない。ダムに立ち（睡）蓮を目の前にして、百数十年前のドーラの切なる思いが伝わってきた。再び深い感動と共に、祈りを合わせた一時であった。そしてこのあと、「宣教の種」と「蓮の種」が重要なキーワードとなっていく⁶。

このようにドーラの日本への「宣教の種」が生まれた場所、そして同時に帰米後「蓮の種」を蒔いて日本での「宣教の種」が花開くことを切に祈ったであろう場所でもあるイリノイ州グランディ郡のウィルミントン、シャナハン、モリスを巡った後、ロサンゼルスに飛んで9月15日ボイル・ハイツを訪問した。ドーラが晩年に住んでいた通り、通っていた教会跡（現在この辺りはヒスパニック系の住民が多く、教会跡地もメキシカンの集会所になっている）を歩き、そこからほど近い、青山学院と校友及び関係者により建立されたドーラと夫ヘンリーのお墓（Odd Fellows Cemetery内）をお参りした。

ドーラは夫の療養のためシカゴから遠く離れたこの一画に移住し、試練の日々を経験しつつも、「宣教の種」の実りに支えられながら、教会で海外宣教の地道な奉仕を続け、天に召される直前に遺言とも言えるメッセージを執筆した（棚村著書、第5章）。実際にその場に立つと、決して華やかとは言えない晩年の日々の中で、良き日も悪い日もドーラが捧げ続けた祈りが伝わってくるようであった。

4. 2023年10月－博物館のステフェス氏に会うー

9月モリス等訪問後、博物館にメールを送ったところ、ステフェス氏から早々に返事をいただき、10月13日博物館にお伺いすることになった。ステフェス氏は棚村師のことをよく覚えており、当時の資料を分厚いファイルにまとめておられた。（後述のエダー博士の論文も保存しておられた。）またドーラの採用試験その他教育委員会の記録をはじめ、当時の貴重な原資料も拝見した。そして上記、「蓮の種」の1922年新聞記事に加え、モリスにも蓮の花が咲いているという記事も見せていただいた（*Morris Daily Herald*, July 9, 2007）。棚村師のリサーチのことを（調査訪問は一回だけだったにもかかわらず）ずっと心に留めて、何か情報があればストックして下さっているその姿勢から、ステフェス氏の誠実さと心配りと友情を強く感じた。



蓮の由来に関する記事

9月のモリス等訪問後、伊藤校友会シカゴ支部長とは、青山学院に関わる者たちがその「宣教の種」が生まれた場所に立つことができれば素晴らしい経験になるだろう、また「蓮の種」の調査は今後進めていく価値があるだろう、ということを話し合った。そしてこの10月のステフェス氏面談における相談事項として、前者に関しては（丁度10月1日にシカゴ支部による「リング狩り」の遠足があり、私もそれに楽しく参加させていただいたので⁷、そのイメージで）まずは子どもたちも楽しめるような遠足がモリスやシャナハンで可能かということ、後者に関しては、蓮の採取等を含めた調査を相談できる窓口になるモリス市の職員の紹介をしていただけないかということ、を尋ねることになった。

ステフェス氏は、この時もその誠実さと心配りを見せて、初対面の私に対して、前者に対しては詳細な提案（ドーラの時代の追体験として、船による運河ツアーができること。またモリスのセントラル・スクールや、シャナハンの蓮の花見学、そして子どもたちの自然体験などを含めた一泊のプログラム案を即座に考えて下さった。）、後者に関してはその場で市の職員の連絡先を教えて下さった。

5. 2023年11月ーモリス市役所訪問ー

そこからモリス市職員とのやり取りが始まり、市役所を訪問することとなったが、その際クリス・ブラウン（Chris Brown）市長と面談する運びとなった。このように関係が広がってくると、継続性を考えて、校友会シカゴ支部にも組織的に関わっていただく必要が出てくるだろう、ということで伊藤支部長と相談し、支部長、伊藤京子

事務局長、徳吉史子副支部長と共に11月30日に市庁舎に伺うこととなった。伊藤支部長には、青山学院の歴史、ドーラの歩み、蓮の種についての資料を作成いただき、市長室にて詳細に説明をしていただいた。このプレゼンテーションを通して、市長は今まで知ることのなかったドーラの歩みに大変感銘を受け、蓮に関する今後の調査や活動について全面的に協力して下さることになった。なおモリス市報に我々の訪問の記事が掲載されている⁸。

市庁舎訪問後、その足でシカゴ支部の皆さんと博物館を訪問した際、思い切って「この博物館の一角に、ドーラの常設展示コーナーを設けることを検討してくれないか。小さなスペースでよいので。」と依頼した。然るに、その場で前向きな返事をいただいた。大変嬉しいことであった。

この依頼をした背景には、前節4で述べた10月訪問後、伊藤支部長とは、校友会シカゴ支部に限らず青山学院関係者のモリス等訪問が実現できればよいが、そのためには博物館にドーラの資料展示があれば現実味を帯びてくるだろう、という話を始めていたことがある。そして上記のように市役所訪問の主たる目的は蓮の調査への協力を求めることで



モリス市報の記事（抜粋）

あったが、調査には更に時間がかかることが予想されたので、モリス市との継続的な関係を作るためにも、博物館展示は有意義と思われた。加えて、モリス市は先に述べたように顔の見えるコミュニティで、何世代も住み続けている人たちも多いが、しかし現地において（市長がそうであったように）ドーラのことは殆ど知られていないことがわかったためでもある。このようにして、ここからドーラの展示の動きが始まることになる。

6. 2024年1月－学院への提案書提出－

さて、常設展示ということになると、筆者個人また校友会シカゴ支部の範囲を超えたレベルとなり、青山学院の了解が必要になってくる。また展示のための資料についても学院からの提供協力が必要であろう。そこで、学院（山本与志春院長）へ伊藤支部長と連名で「提案書」を提出することとした。丁度2024年度が学院創立150周年となる。従ってドーラ展示はベストのタイミングと思われたので、タイトルは「米国イリノイ州に於ける青山学院創立150周年記念に向けての活動のご提案」（2024年1月4日付）とした。この文書作成についても、伊藤支部長が相当部分を担って下さった。

7. スクーンメーカー「宣教の種」プロジェクト

提案書には、今後に向けて実現をめざしたいと考えるに至った三つの項目を並べた。

- ①イリノイ州モリス市にあるグランディ郡歴史協会の博物館の一角にスクーンメーカー宣教師の足跡に関しての資料展示スペースを設ける。
- ②スクーンメーカー宣教師が米国帰国後グランディ郡運河に蒔いた可能性のある蓮の種の調査。
- ③スクーンメーカー宣教の種ツアー（青山学院関係者による）。

こののち、これらを「スクーンメーカー『宣教の種』プロジェクト」と銘打って、校友会シカゴ支部と共に取り組みを進めていくことにした。現在の進捗状況としては、①は実現、②は検討段階、③はツアープランはほぼ出来上がっている状態、そして加えて④としてスクーンメーカー・ファミリー研究も新たにテーマに上がってきている。

8. 2024年1月から2月にかけて－資料センター、学院史研究所の協力－

提案書のうち、この段階で学院の了解と協力を得る必要があるのは①である。山本院長は年初にもかかわらず、提案書を受け取ってすぐ、迅速に各関係部署に当たって下さり、展示の了解と共に、青山学院資料センターの協力を取り付けて下さった。そこで1月28日に資料センター及び青山学院大学学院史研究所の教職員とのオンライン打合せを持つ運びとなった。

博物館の展示に当たり、以下の二点については不可欠と思われた。

- a) 資料センター所蔵のドーラ関連資料のピックアップと提供

b)「ドーラ・E・スクーンメーカー年譜」(棚村著書、329頁以下)の英訳

資料センターと学院史研究所は、早々にa)の一覧を作成してくださった。またb)については翻訳を個人的に依頼していると大変な時間がかかるところ、業者発注をかけてくださった。そのおかげで棚村師に翻訳チェックをしていただく時間的余裕が生まれ、こちらについても3月には英訳年譜完成版を博物館に提供することができた。なお現在、博物館における展示においては、各ステージにおいてQRコードを読み込むことで、当該時代の年表を見ることができるようになっている。

9. 2024年3月から4月ー博物館による常設展示準備とツアー試行ー

3月8日、展示の枠組みができたということで、博物館に確認に行った。その際に驚いたのは展示スペースの広さ、そしてストーリー性である。11月には、ごく小さな一角でもよいからと展示依頼したのであるが、実際には4×6メートルほどもある広いスペースが確保されていた。そして展示は棚村著書の章を基にした6つのステージにより、ドーラの生涯を辿っていくという構成である。質量ともに充実した中身となっており、集中的に広く深い調査を行ったことがわかる。博物館の意気込みを感じた。



完成した常設展示スペース

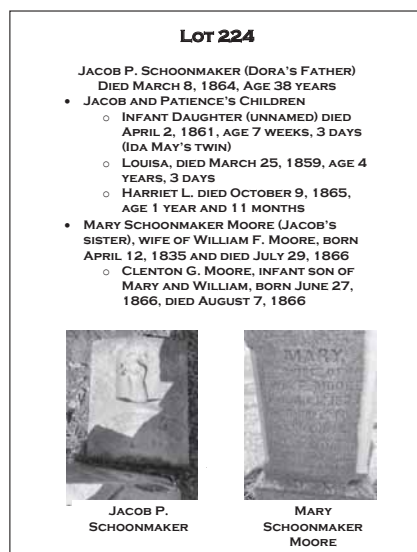
展示内容としては、棚村著書における写真や図表(そのオリジナルは博物館ないしモリス市図書館所蔵のものがかなりある)、そして資料センター所蔵資料(特に日本における写真や図表、卒業生の写真など)も有効に活用されているが、博物館が新たに探し出した、地元ならではの地図や新聞、資料等も相当数が展示されている。そしてこれらの展示資料に対して、棚村著書を読み込んだ上での博物館による詳細な説明が、数多く加えられている。

こののち、6月29日のオープニング・セレモニーまでに、資料もその配置もさらに整えられていくが、6つのステージにより「ドーラの生涯」を見通す、というコンセプトは揺るぐことはない。それ故、手を加え修正をしていくごとにますます圧巻の内容となっていく。これは棚村師(メールによる頻繁な問い合わせにいつも丁寧に答えてくださった)、青山学院、そして何よりこの展示に至るまで何度も博物館に通い、アドバイスを重ね一緒に展示を整えていった伊藤泰彦校友会シカゴ支部長と伊藤京子事務局長による、博物館との共同作業の成果である。展示の詳細は、冒頭に述べたように、改めて別稿・報告第二部(注3参照)で紹介する。

3月28日に博物館を再訪した。展示はさらに充実を見せていたが、この日は歴史協会による「ゆかりの地ツアー」の試行が行われた。青山学院関係者が来訪して博物館展示を観

たあと、150年前のドーラの生活の跡を辿ることができれば、さらにドーラへの理解と共感が深まるであろうと考え、検討を依頼していたことに対し、展示作業と平行して準備をして下さったのである。半日をかけたツアー完成版は、オープニング・セレモニー後に実施されることとなる。訪問場所は注(3)に示した別稿で述べるが、既にこの段階で、スクーンメーカー・ファミリーの多くのお墓があるウィルミントンのオークウッド墓地 (Oak Wood Cemetery) のガイドブックレット (日本語バージョンも作成) が出来上がっていたことにも驚いた。

4月から5月にかけて、青山学院への報告のため、伊藤支部長が展示動画を作成くださった。5月の動画には、宗教センターの了解を得て、学院大学聖歌隊の演奏をBGMとして使わせていただいた。



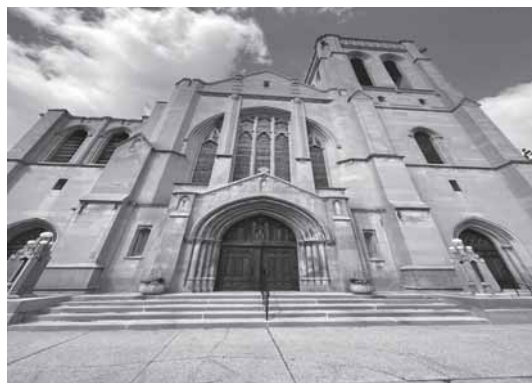
Oakwood Cemetery Booklet (抜粋)

10. 2024年4月ーエバンストン第一合同メソジスト教会訪問ー

ドーラはメソジスト監督教会婦人海外伝道局 (WFMS-MEC) から日本へ派遣されるのであるが、その派遣式が行われたエバンストン第一合同メソジスト教会 (First United Methodist Church of Evanston) に4月12日、校友会シカゴ支部長、事務局長そして副支部長 (奥村晃代氏) と共に訪問することが叶った。派遣式 (Missionary Meeting) は1874年9月20日に行われた。現在の教会堂は建て直されたものだが (それでも1910年建立の、歴史ある重厚な礼拝堂である)、ドーラが派遣された同じ場所に立つことができ、ここでもまた感動を覚えた。

この教会には専属のアーキビストがおり (Dr. Cate Whitcomb)、ドーラについて調べてくれたが、残念ながら教会内には1890年頃より前の資料はないということであった。

このエバンストン教会は、WFMS-MEC ノースウェスタン支部メンバーに加えて、日本の「矯風会」につながるクリスチャン女性禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union. 以下WCTUと略す。) を発展させたフランセス・ウィラード (Frances Willard) などもまた深く関わっており、女性のエンパワーメントの歴史を担ってきた場である。6月29日オープニング・セレモニーのあと棚村師と共に、そし



エバンストン第一合同メソジスト教会外観

て7月末に来訪して下さった伊藤悟青山学院宗教部長とも、この教会の礼拝に出席したが、主任牧師、副牧師とも女性であり、メッセージもまた性的少数者のエンパワーメントに関わる内容を含んでいたことが印象に残っている。

11. 2024年5月ーフランス・ウィラード博物館訪問ー

エバンストン第一合同メソジスト教会のすぐ近くにフランス・ウィラードの博物館（Frances Willard House Museum）がある。そこには津田仙がWCTUに寄贈した鐘（Temple Bell）が置かれている。津田は矯風会の活動にも協力してきたのであるが、この鐘はその禁酒禁煙運動の成果としてキセルを溶かして制作したものである。1893年シカゴ万国博覧会の審査員として来訪したとき、この鐘を携え持ってきて



津田仙寄贈の鐘

展示し、そののちWCTUに寄付した。なお津田はこの時、ドーラとの再開を果たしている。因みに、女子小学校におけるドーラの最初の生徒であり最初に受洗に至った一人である小崎（岩村）千代は、初代会頭矢嶋楫子のあと矯風会会頭になっている⁹。この博物館に、5月22日にはシカゴ支部長、事務局長、博物館のフーチン歴史協会長と共に、7月29日には支部長、事務局長、伊藤悟宗教部長と共に訪問した。ウィラード博物館側からは、学芸員1名と、ウィラードの遠縁にあたる子孫の方1名が対応し、館内ツアーを組み、詳細な説明をしてくださった。

12. ノースセントラル大学とスーザン・バーンファインド宣教師

シカゴから西に30マイルほどのネイパービル（Naperville）にある、青山学院大学の協定校であるNorth Central College（NCC）から、他の米国女性宣教師との比較においてドーラについて理解を深める、という観点が与えられたことを、ここで述べておきたい。NCCは学生に寄り添ったりベラルアーツカレッジとして少人数教育を展開している協定校であるということに関心を持ち、2023年11月に既に一度見学させていただいたのであるが、その時に、チャペルの前のパネルの中に、“Tokyo Bible School Instructors, Including Three Alumnae, ca. 1905”という写真があり、そこに写っているのは女性宣教師として日本に渡った卒業生である、という説明を聞いたことがずっと気になっていた。

2024年4月エバンストンの教会訪問は、11月に上記の説明をしてくれたエリック・ドリトル師（Rev. Eric Doolittle）の協力により実現したのであるが、4月のやり取りの際、当該写真の卒業生についてももう少し詳しく知りたい、とお願いした。ドリトル師はNCCの資料センター長クリス・マルドレイ・ジェロシック氏（Kris Maldre Jarosik, Head of

Archives and Special Collections) を紹介してくださった。ジェロシック氏はまずNCCの歴史について教えてくださった。NCCは福音教会(Evangelical Church)によって設立されたが、福音教会は戦後キリスト同胞教会(United Brethren in Christ)と統合、さらに合同メソジスト教会と統合して現在に至っている、ということである。

そして写真の女性宣教師は、スーザン・バーンファインド(Susan Bauernfeind)であることを教えてくださり、その歩みを記した論文をいただいた¹⁰。その概略を記しておこう。スーザンはNCC(当時はNorth-Western College)での4年間の教育を終えて卒業した翌年1900年に、もう一人の宣教師(Anna M. Kammerer)と共に、福音教会から派遣されて日本にやってくる。同教団の婦人宣教局(Woman's Missionary Society, 以下WMSと略す。)の推薦とサポートによるのであるが、WMSは、この段階ではWFMS-MECのような女性組織としての自立性を獲得しておらず、派遣には教団としての決定が必要であった。スーザンは来日後、試行錯誤ののち女工伝道を始めてそれが軌道に乗るが、バイブルウーマン養成の必要性を強く感じ、1904年にBible Women's Training Schoolを立ち上げる。この学校は大きな成功を収め、ニーズに応えるため、1921年にTokyo Bible Schoolと改名して、男子学生にも開いて、英語教育も強化していく。スーザンは一生日本に留まるつもりだったが、二次大戦の本格化に伴い、1941年4月に止むなく米国帰国する。二次大戦後、勝利に沸く米国の中で、スーザンは日本の破壊状態に心を痛め、戦後間もなくの1945年10月27日母校の神学校学生への講義において、東京だけでも250の教会が破壊されたことに言及し、彼女が知る限りの犠牲者の名前を一人一人読み上げ、和解の呼びかけをもって講話を閉じる。そしてスーザンはその夜に天に召されたのである。すなわちこのメッセージは彼女の日本の人々に対する最後の奉仕であった¹¹。スーザンとアンナが建て、長く拠点としてきた教会は、現在の日本基督教団小石川白山教会である。その会堂名はSusan Bauernfeind記念会堂であり、同教会はスーザンの歩みを今もしっかりと覚え続けている¹²。

スーザンの働きは、時代も、宣教の展開も、滞在期間も、教団も、ドーラとは異なって



スーザンの写真(論文表紙より)



スーザン・バーンファインド記念会堂
(小石川白山教会WEB Pageより)

おり、対照的である。しかし同時に19世紀に（しかも同じイリノイ州で育まれた）共通する女性の生き方に貫かれている。その意味で、スーザンの歩みと照らし合わせることで、ドーラの生き方の特徴もまた、米国の女性史、キリスト教史の観点から、より鮮明に浮かび上がってくる。NCCでのスーザンとの出会いもまた、ドーラの歩み、「宣教の種」の理解につながっていく貴重な示唆となった¹³。

上記7の「宣教の種」プロジェクトの③「宣教の種」ツアーが実現した暁には、10のエバンストン第一合同メソジスト教会、11のフランセス・ウィラード博物館、そしてこの12の協定校NCCは訪問に加えたい場所である。

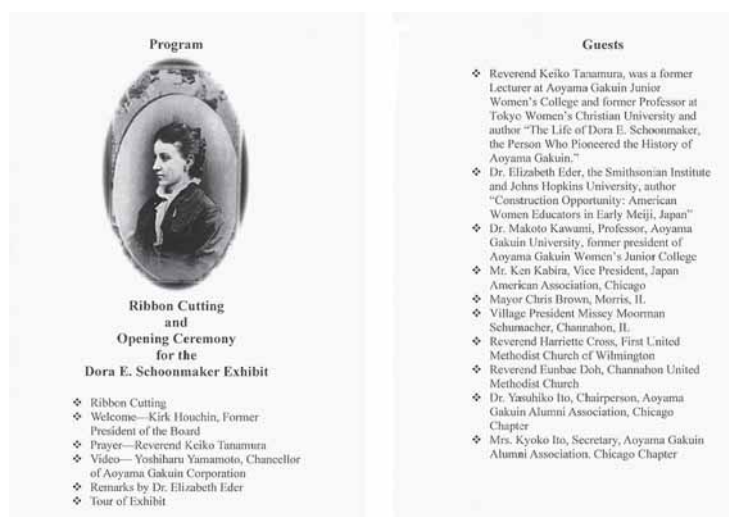
13. 2024年5月から6月ー常設展示への青山学院の協力ー

博物館の常設展示オープニングに向けて、青山学院も積極的な協力を惜しまなかった。山本院長はセレモニーのための祝辞（ビデオメッセージ）の依頼を快諾くださった。実際にはキャンパスにおける屋外の撮影は大変で、チャイムや飛行機や生徒たちの声を避けるために、時間帯を選びつつ何度も撮り直しをしなければならなかったとのことである。学校ならではのエピソードであるが、それでも学院本部のあるベリーホール前のドーラのレリーフでの撮影にこだわってくださったことに感謝したい。

また、6月には常設展示への校友会シカゴ支部の協力が、青山学院の150周年記念事業として認められた。そのお陰で、150周年のロゴを式次第そして展示の中にも掲載し、常設展示が博物館と青山学院の共同作業であることを明示することができた。

14. 2024年6月29日ドーラ常設展示オープニング・セレモニー

このようにして、念願のドーラ・E・スクーンメーカー常設展示オープニング・セレモ



式次第



テープカット



オープニングセレモニーの様子

ニーが、6月29日に開催された。約65名の参加者があったが、その顔ぶれは多様である。代表してテープカッターになった人たちを見れば、このスクリーンメーカーの展示がどのような人たちの結びつきによって実現しどのような人たちとの繋がりを生み出したかがよく分かる。

来賓：

棚村恵子牧師・元青山学院女子短期大学講師、元東京女子大学教授。『しなやかに夢を生きる』の著者

エリザベス・イダー (Elizabeth Eder) 博士・スミソニアン協会学芸員、ジョンス・ホプキンス大学講師。『機会を構築する－明治初期のアメリカ女性教育者』¹⁴の著者

河見誠青山学院大学教授、元青山学院女子短期大学学長

川平謙慈シカゴ日米協会副会長 (Vice President, Japan America Society of Chicago)

クリス・ブラウン (Chris Brown) モリス市長

ミシー・ムーアマン (Missey Moorman) シャナハン村長

ハリエット・クロス (Harriette Cross) ウィルミントン第一合同メソジスト教会牧師

ユンビ・ソー (Eunbae Soh) シャナハン合同メソジスト教会牧師

伊藤泰彦博士・青山学院校友会シカゴ支部長

伊藤京子青山学院校友会シカゴ支部事務局長

博物館のスタッフ：

カーク・フーチン (Kirk Houchin) 歴史協会会長 (当時。現在、財務責任者)

デビー・ステフェス (Debbie Steffes) 学芸員

メアリ・コリンズ (Mary Collins) 歴史協会運営事務局長

この日のために、地域のボランティアが手作りオーナメントを制作し配布してくれた。ドーラの時代と変わらず、この地には生きたコミュニティが存続していることの証



オープニング記念に製作されたオーナメント (表・裏)

である。式次第は提示した通りである。伊藤支部長がスライドを用意して展示の説明をしてくださった。またエダー博士は、明治期日本の女子教育における女性宣教師の働きの意義についてお話しくださった。山本院長の祝辞 (ビデオメッセージ) は、ドーラを通して150年後にモリスと日本がつながったことを実感する時間となった。ドーラの思いと祈りを継承し続けている学院の姿勢が、レリーフを背景にした美しい映像と共に、参加者の心に染みわたっていった。

そして素晴らしかったのは、ドーラ伝著者の棚村恵子師が駆けつけてくださったことである。これは博物館にとって代えがたいプレゼントとなり、大いなる励ましになった。

以下、山本院長の祝辞（ビデオメッセージ）、そして晴れやかなテープカットに続いて語られた棚村師の挨拶と祈りをここで紹介しよう。

私は青山学院院長山本与志春です。

この度、グランディ郡歴史協会博物館にドーラ・E・スクーンメーカー常設展示コーナーが開設されましたこと、青山学院を代表して感謝とお慶びを申し上げます。

今から150年前、1874年11月16日、23歳のドーラ・スクーンメーカー宣教師は女子小学校を開設しました。女子小学校といえどもたった7人の生徒。校舎も教科書もノート也没有。あったのは、女子の学校を作りたいという強い意志。キリスト教を伝えたいとの信仰でした。150年経った今、青山学院は幼稚園、小学校、中学、高校、大学、大学院で23,000人が学ぶ総合学園になりました。高校生が一番入学したい大学のランキングの1位になっています。ドーラ・スクーンメーカーが灯した小さな光が大きな光となって輝いています。一粒の種が鳥を宿すほどの大きな木に成長しました。それは、5つのパンと2匹の魚で、5,000人が満腹した奇跡を彷彿させる、神様の祝福の象徴です。ドーラ・スクーンメーカー宣教師の育った街に、彼女の業績が展示されることは、青山学院にとって大きな喜びであり感謝です。これに携わってくださった皆様に心から感謝を申しあげます。これを機会に、青山学院とグランディ郡の交流が進められますよう願います。本日はおめでとうございます。



山本院長ビデオメッセージ

皆さん、こんにちは、日本の東京から参りました棚村恵子です。ドーラ・E・スクーンメーカーの展示の開会を祝うために、皆さんと一緒できることを大変嬉しく、また光栄に思います。

ドーラを記念するこの素晴らしいプロジェクトに熱心に参加された皆様、そして創立150周年を迎えられた青山学院に心よりお祝い申し上げます。

ドーラ・スクーンメーカーは素晴らしい方でした。東京での5年間という短期間の宣教師活動にもかかわらず、彼女は生涯を通じてその使命感を燃やし続けました。ドーラは日本における女子教育の礎を築く種を植え、明治の時代に政府からの妨害や社会の冷たい風潮を乗り越えました。帰国後も、彼女は太平洋のこちら側から設立し

た学校を絶えず支援し続けました。

彼女の人生そのものがメッセージです。夢をしなやかに生きること。勇気を持って海を渡ること。人々をつなぐ架け橋になること。道を切り開くこと。異なる国籍と文化の土地に平和と善意の種を植えること。どんなことや誰によっても損なわれない持続的な友情を築くこと。「光の子」として他者に仕え、愛すること。これが彼女から私たちへのメッセージです。確かに、彼女の人生こそは過去において、そして今もお私たちへのメッセージです。

最後に、この記念すべきイベントに私を招待してくださったグランディ郡歴史協会と青山学院校友会シカゴ支部に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

ご一緒に祈りましょう。

親愛なる恵み深い神様、

あなたの御名を賛美します。この素晴らしい祝福の時を共に過ごせることに感謝します。あなたの思いと道は私たちの思いと道をはるかに超え、あなたのご計画は常に私たちの前を進むことを賛美します。あなたは力ある者ではなく、ドーラ・スクーンメーカーのようなあなたの小さな忠実なしもべを通して目的を達成されます。

150年前、彼女の美しい故郷ウィルミントン、シャナハン、そしてモリスから東京の街へあなたの愛の大使としてドーラを送り出してくださったことに感謝します。あなたは小さなドングリを大きな樫の木、すなわち青山学院に成長させてくださいました。どうか彼女の貴重な人生に関する今回の展示が、アメリカと日本の永続的な国際友情の象徴となりますように。

この心からの感謝をイエスの御名においてお捧げします、アーメン。



棚村先生の挨拶・祈祷

15. 2024年7月ー伊藤悟学院宗教部長来訪ー

7月26日から31日、伊藤悟学院宗教部長がイリノイに来訪された。博物館表敬訪問ののち、博物館スタッフがドーラのゆかりの地ツアーを組んでくださった。伊藤宗教部長にはその他、上記10のエバンストン第一合同メソジスト教会、11のフランセス・ウィラード博物館、12の協定校N C Cも巡っていただいた。そしてシカゴ支部の校友との交流会も持つことができた。

博物館のあるモリス、シャナハン、ウィルミントンは、青山学院がその創立のルーツとスピリットを覚え続けるために、今後も関わっていく場となるであろう。学院宗教部長の来訪は、その未来の関わりに向けた一歩となった。

16. 2024年11月17日ーウィルミントンでの「青山学院創立150周年記念」特別祈祷ー

スクーンメーカー一家は1856年（ドーラ5歳）にニューヨークからウィルミントンに移住し、1864年（ドーラ13歳）まで住んでいた。そしてドーラが海外宣教への夢を抱くことになったのは8歳の時である。その意味で、一家が通っていたウィルミントン第一合同メソジスト教会（First United Methodist Church of Wilmington）は、ドーラの信仰と日本宣教の原点と言えよう。

11月17日、そのウィルミントンの教会において、ドーラの働きとその実りである青山学院150周年を覚え感謝する礼拝が持たれた。ハリエット・クロス牧師（Rev. Harriette Cross）によりドーラの信仰とビジョンに貫かれた歩みについてのメッセージがなされ、青山学院創立150周年を祝する特別祈祷がもたれた（“Prayer Service honoring the 150th Anniversary of the founding of Aoyama Gakuin University in Tokyo Japan, through the missionary efforts of Dora Schoonmaker”）。この礼拝には、グランディ郡歴史協会博物館、ウィルミントン歴史協会、校友会シカゴ支部のメンバーも出席し、日米で心をつなげて祈りが捧げられた。

11月15日、青山学院大学における創立記念礼拝で、筆者はドーラの生き方について奨励をさせていただいた（題：「託し、祈り、支える生き方」）¹⁵。そこでは、ウィルミントンの教会でのその二日後の礼拝における皆様とも心を合わせられることに対する感謝の祈りを捧げた。11月16日創立記念日には、青山学院講堂において、青山学院150周年記念式典が記念礼拝をもって挙行された。そしてその翌日の11月17日ウィルミントンの教会の礼拝へと、祈りのリレーが実現したことになる。150年前にドーラが蒔いた種は、150年後の今、日本とアメリカの両方が繋がってさらに新しい花を咲かせようとしている。



司式のHarriette Cross牧師

17. 広報

ここに記した博物館常設展示実現のプロセスは、その後の動きも含めて、自分たちの思いを遙かに超えた出会いの連鎖が生み出した、一種のムーブメントのように感じられるものであった。遠く離れた場所でのイメージしづらい働きに対して、学院広報もこのムーブメントの輪に連なり、青山学院内外に発信下さった¹⁶。

また、青山学院校友会サイト「シカゴ支部活動」では、さらに関連する様々な資料や写真等がアップされている¹⁷。モリスの地元紙においても、セレモニー及び伊藤学院宗教部長訪問の記事が掲載されている¹⁸。

Ⅲ さらなる対話の出発点として

常設展示は、上記のように、ドーラとの対話の輪が様々な人を巻き込みながら波紋のように広がっていった到達点である。それは出会いの連鎖によって作り上げられていったが、出会いとその連鎖を生み出したのは、場・空間の力である。現地に立つことがいかに重要であるか、改めて教えられた1年であった。その意味で現地にドーラの常設展示の場が生まれたことの意義の大きさは測り知れない。

そして何よりも、150年前に「宣教の種」を蒔いたドーラの思い、折りこそが、時間を越えて、関わる者たちを動かす原動力となったことが、この経緯報告の中で確認されるであろう。ここでドーラとの対話の中核的な柱となったものは、Ⅱ3で述べた、ドーラが日本から米国に持ち帰ったと思われる「蓮の種」であった。

実現した常設展示は、ドーラとのさらなる新たな対話へと私たちを誘う出発点と言えよう。その展示内容はドーラの生涯全体を見渡す、質量共に充実したものであるので、冒頭に述べたように、注3に記載した報告第二部で詳述する。そこから、ドーラが150年後の私たち（日本に住む人、グランディ郡に住む人、いずれをも含めて）を動かす力をなぜ持っているのか、共鳴を生み出す「しなやか」な生き方（棚村著書のタイトル）とはどのようなものか、といったより深い問いかけへと導かれていくことになるだろう。

ここまでの宣教の種プロジェクトは、伊藤泰彦支部長をはじめとした校友会シカゴ支部の皆様の尽力なしには実現できなかった。伊藤支部長は今も続けてグランディ郡歴史協会博物館そしてウィルミントンの教会とも連絡を取り交流を続けてくださっている。本稿の内容チェックも、時間を惜しまず行ってくくださった。本稿を閉じるにあたって、深い感謝の辞を述べたい。

【注】

- 1 拙稿「グランディ郡歴史協会博物館 スクーンメーカー常設展示～『宣教の種』が生まれた場所で～」青山学院資料センターだより第30号（2024年7月）3頁。
- 2 拙稿「ジェンダー研究所開設」青山学報272号（2020年7月）76頁。「最終号を迎えるにあたって－総合文化研究所の成果、そして未来へ－」青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第29号（2021年12月）1-2頁。
- 3 「スクーンメーカーの「しなやかに夢を生きる」生涯－グランディ郡歴史協会博物館による常設展示開始」『キリスト教と文化：紀要・青山学院150周年記念特別号（第40号別冊、2025年3月）』以下、「報告第二部」とする。
- 4 棚村恵子『しなやかに夢を生きる－青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』（青山学院、2004年11月16日）。以下、「棚村著書」と略す。本書は青山学院創立130周年を記念して『力を与えませ 本多庸一夫人貞子の生涯』と共に青山学院が発行し、記念式典において贈呈されたものである。そして2020年青山学院女子短期大学設立70周年に当た

り復刻版を発行した。

- 5 この記事に関する説明と抄訳については、展示を紹介した前掲注3・報告第二部二5参照。
- 6 但し、6月29日オープニングセレモニー後のツアーでは、蓮が満開の別の水場のある自然公園（Four Rivers at the Confluence）に立ち寄ったのであるが、その環境教育センターのガイドによると、そこに群生する蓮はアメリカ由来のものであろう、ということであった。ドーラが種をどこで蒔いたか。どこにどのように流れていったか。交雑した可能性があるか。また、常設展示ステージ5の中には、その後1970年代には蓮は絶滅したという別の記事も示されている（“History of Channahon: From Past to Present,” Channahon - Aux Sable Heritage Society, 1972）。そもそもドーラが種を日本から持ち帰ったか、だとすれば津田仙が渡したものか、ということを含め、真相を見出すためにはさらなる調査が必要である。
- 7 10月1日Kuiper Apple Orchardへの校友会シカゴ支部遠足で、女子短期大学教養学科・専攻科1999年卒奥村晃代さんと驚きの嬉しい再会となった。奥村さんが米国大学留学の際、筆者は推薦状を書いたのであるが、会うのは約15年ぶりとなった。現在シカゴに在住して元気に頑張っており、シカゴ支部にも積極的にに関わり、副支部長の一人となっている。
- 8 *Morris City Newsletter*, Spring 2024, p.11.
- 9 小崎千代はまた、青山女学院校友会発足時から1939年77歳で亡くなるまで校友会長を務め、青山女学院を支え続けた（拙稿「大学の教育目的につながる生涯教育のあり方ー青山学院女子短期大学同窓会の取組ー」青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第29号、2021年12月、6-7頁）なお、1921年ドーラ70歳のクリスマスに、二人はロサンゼルスで43年ぶりに喜びの再会を果たしている（棚村著書283頁）。
- 10 Kevin Nalefski, “A Woman on a Mission: The Story of Susan Bauernfeind and Protestant Women in Missionary Work,” North Central Undegraduate Archives Publication, Nr. 11, 2017.
- 11 「私は長い年月日本で過ごし、多くの魂をキリストのもとに呼び戻すことができたという特別な恵みを神に感謝します。戦火によって栄光の座の元に逝った兄弟姉妹達はキリストと共にいます。彼等は人に仕え愛に生きた人達でした、そして彼等の魂は勝利して主と共に生きています。遺された人達は（落胆せず）勇気をもって与えられた命を生きようとしています。神は日本におけるキリストの教会に、これらの信仰ある者たちを通して、力を与えてくださるでしょう。彼等は我々の祈りを必要としています。」（*op. cit.*, p. 23.）
- 12 在外研究から帰国後9月26日に、日本基督教団小石川白山教会を訪問させていただいた。その時に『愛の泉の百年ーバーンファインド宣教師の伝記』（2002年。Lowell Meserschmidt, *Bauern-Sensei: The Story of Susan Bauernfeind Pioneer Missionary to Japan*, Lima, OH, 1991の翻訳）『小石川白山教会百年史』（2008年）の二冊をいただいた。『百年史』には、スーザン達がバイブル・ウーマン育成を決意し取り組んだ契機は、「メソジスト派宣教師ミス・マチルダ・スペンサーと語り合う機会」であったと記されていた（32頁）。Miss Matilda A. Spencerは1878年10月、ホルブルックと共にWFMS-MECから海岸女学校に派遣され、その一年後にドーラが「宣教の種」のバトンを託した宣教師の一人である（青山さゆり会『青山女学院史』1973年、83頁）。

間接的ながら、このような形でドーラとスーザンのつながりがあったことに驚きと感動を禁じ得なかった。いただいた二冊とも非売品であり、小石川白山教会に伺わなければ手にし読むことができなかった貴重な書である。突然の連絡にもかかわらず、時間を作ってくださり、またこのような他に代えがたい「お土産」を用意くださった早川真牧師、坂元高牧師に感謝申し上げたい。因みに坂元牧師は青山学院高等部・大学日本文学科の卒業生であり、この点でも嬉しいつながりをいただいた。ドーラの蒔いた「宣教の種」は、新たなつながりと対話を生み続けることを実感した出会いであった。

- 13 もう一つ付言すれば、NCC及び福音神学校の卒業生で、「学校の使命と伝統である価値－高潔なリーダーシップ、正義と奉仕に生きる歩み－を体現して生き抜いた者たちを覚え讃える」ための「証人たちの壁」(Wall of witness)というパネルが、礼拝堂の横の壁に掲げてある。そこに1950年卒太田俊雄牧師・敬和学園高校初代校長の銘が並んでいる。太田師は、7月末にNCCと一緒に訪問した伊藤悟学院宗教部長の恩師である。

- 14 Elizabeth Eder, "Construction Opportunity: American Women Educators in Early Meiji, Japan," 2001. ドーラに関する数少ない先行研究となる博士論文(棚村著書307頁参照)。

- 15 青山学院大学礼拝サイトに動画がアップされている。

https://www.aoyamagakuin.jp/post_consistency/onlinereihai/

- 16 発信された記事を列挙しておく。

- ・前掲注(1)・青山学院資料センターだより第30号(2024年7月31日)。
- ・「アメリカ・グランディ郡歴史教会博物館におけるスクーンメーカー常設展示とオープニングイベントを開催(<メッセージ>河見誠「ドーラの蒔いた種」、伊藤泰彦「受け継がれる青学マインド」含む)青山学院ウェブサイトニュース(2024年7月9日)。
- ・「アメリカ・グランディ郡歴史教会博物館におけるスクーンメーカー常設展示とオープニングイベントを開催」(伊藤泰彦「『青が、来る』ドーラ・E・スクーンメーカーの人生を辿る常設展示」含む)青山学報289号(2024年10月15日)18-19頁。
- ・河見誠、伊藤泰彦「米国ウィルミントンの教会(ドーラ・スクーンメーカー宣教師の出身教会)の礼拝で特別祈祷がささげられました」青山学院ウェブサイトニュース(2024年11月21日)。

- 17 <https://www.alumni-aoyamagakuin.jp/chicago/>

- 18 Grundy County Historical Society debuts Aoyama Gakuin founder Dora Schoonmaker exhibit, *Morris Herald News*, July, 1, 2024. Aoyama Gakuin University Chaplain visits Schoonmaker exhibit at Grundy County Museum, *Morris Herald News*, August 16, 2024.

The Fruits of the “Seeds of Mission” Planted by Schoonmaker 150 Years Later

– The Story of How the Dora E. Schoonmaker Permanent Exhibit in
the Museum of the Grundy County Historical Society Came into Being –

Makoto Kawami

Dora E. Schoonmaker founded the Girls' Elementary School in Azabu on November 16th, 1874. It was the beginning of Aoyama Gakuin, which celebrated its 150th anniversary in 2024. In that very year, 2024, the Dora E. Schoonmaker Exhibit was launched at the Museum of the Grundy County Historical Society in Illinois, USA.

The “seeds of mission” that Dora planted in Japan were returned to the United States 150 years later, to be sown in Grundy County, where Dora grew up, decided to become a missionary and departed for Japan. And now they have begun to bloom newly in the form of her permanent exhibit in the Museum. This was not an intended project, but a movement that spread like ripples further and further beyond the thoughts of those involved, and was itself the process of dialogue with Dora. This article reports on this one-year story, in the hope that it will become the starting point of further movements to the future beyond borders.

Keywords: Dora E. Schoonmaker, Permanent Exhibit, Museum of the Grundy County Historical Society, Aoyama Gakuin's 150th anniversary, the Seeds of Mission
